

大阪女学院大学「教職課程」産声をあげてから1歳に

中井弘一

赤ちゃんが生まれて最初に発する泣き声を産声と言う。医学的な説明によると、赤ちゃんが初めて自分の肺で呼吸をする瞬間、それが産声で、自らが呼吸をして生きていくための準備が整った瞬間であるとのこと、新しい環境に適應することができた証である。

昨年1月25日 文部科学省の認可を受け、本学4年制大学の教職課程が産声をあげて1年が経った。開設に当たっては、OJC 教職のミッションを確立するため、本学の教職課程のビジョンについて他学に見られない方略的な実践活動を入念に設計した。学校現場の先生が日々向きあっている課題の一助となるよう役立つ情報の提供や講習活動を行い、本学の教職課程の「信頼」を築くことをその一番の理念とした。



2010 年度、その方針の実践として様々なことを試みてきた。教員養成センターNewsletter 創刊号〜第 4 号まで発行。開設記念研修や教員免許更新講習の実施。学校現場の先生を交えた学校現場の視点に立った内容の勉強会を 7 回開催。学生もアクセスできる本学教員養成センターのHP (<http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>) による英語教育情報提供の充実。担当教員による教職課程履修学生向け週 1 回〜2 回の教職サークル実施等行ってきた。

さて、今の日本、「内向き志向」「ことばの力の低下」「もの豊かさとの心貧困」「収入格差と教育格差」「学級崩壊」「放任家庭教育」など、様々な教育課題が山積している。自信を喪失し明確な将来の夢や目標を描けない若者が次第に増えている。また、規則を守る意識が薄

れ、学ぶ意欲も低下しているように思われる。この「崖ぶつちの日本」を何とかしなければならぬ。子ども一人一人の自己実現、夢と幸福の追求には、親子のふれあい、友達との遊び、地域の人々との交流が必要である。そしてその根本として教育の力が欠かせない。

満一歳になった教員養成センターは、赤ちゃんのこの世に生まれた純粋な微笑みを忘れずに、こうした現代社会の諸相を踏まえ、学校現場の先生が求める英語指導のあり方を基底に、一層「信頼」される教育活動を展開し、活力ある教員を生み出すためにさらに努力を重ねていきたい。